

## 第 122 話<焙焼炉完成>の要約と参考資料

### 第 122 話<焙焼炉完成>の要約

1955 年 3 月、土呂久鉦山に連続焙焼を特徴とする亜硫酸炉が完成しました。その半月前に対話を重視して新炉建設を進めた小宮新八所長が病気で辞任、1 年後、4 キロ下流の借家で亡くなりました。その墓が鉦山の南、亜ヒの煙を浴びたイチョウの木の下に立っています。

### 第 122 話<焙焼炉完成>の参考資料

#### 1 2 2 - 1 亜ヒ酸焙焼炉契約調印後の動き (1954 年 6 月～1955 年)

1954 (昭和 29) 年

6 月 21 日 「亜ヒ酸炉契約調印完了。午後 4 時より丸菊にて会食す(村長及び部落有志)」  
(小宮鉦山手帳)

6 月 26 日 土呂久鉦業所幹部から藤井仁蔵氏への手紙 (土呂久鉦業所業務書簡綴)  
「今般岩戸村当局との話合がつきましたので、8 月一杯で炉設備を完成し、9 月から砒鉦焙焼にかかり度いと思つて居る次第です。(略) 設備は松尾鉦山の 1 号炉と同様のものので 1 基で 1 カ月砒鉦 (砒素 30%) 20 吨、銅砒鉦 (銅 2.5%、砒素 25%) 20 吨を処理し、精鉦 13 吨と焼成銅鉦 14 吨を生産の予定にしております。元鉦は塊と粉の団鉦で松尾の如く一挙に精砒をつくり度いと思つて居ります」

6 月 27 日 藤井仁蔵氏から土呂久鉦業所幹部への手紙 (土呂久鉦業所業務書簡綴)  
「尚ほ 8 月から炉を造られるとのことですが、炉は図面通りに造るとなかなか思う様に仕事が出来ず、実は松尾の 1 号も 2 号炉も後で随分手を入れてようやくあれだけ出来たのでした。新しく造るとすればもっとよく研究せられて出来るだけいい物を作られる様に御すすめします。一度造ってしまうとなかなか後では直しにくいものです。例えばチャンバーに移るところ、チャンバーのレンラク等煙突の出口など皆一連のつながりが入りますから……炉のなかの煉瓦の積み方なども一工夫要します」

7 月 1 日 土呂久鉦業所幹部から藤井仁蔵氏への手紙 (土呂久鉦業所業務書簡綴)  
炉の注文先：大分市中島十條通り 2 丁目 大分溶接工業株式会社

7 月 5 日 参集者 永見、篠田 (本社側) 土呂久へ来山す。小宮、根本、堀越 (土呂久側)。亜硫酸炉建設費は今月末迄に 30 万円位の仕事をする事。資金は 30 万円位鹿折から入金できる由。上記 30 万の内 10 万円を現金で送れと云ふた。之れは篠田氏帰郷の上本社で相談する由。(小宮鉦山手帳)

- 8～9月 台風5号、13号、12号に襲われて亜ヒ酸焙焼炉建設に遅れ
- 9月19日 社長来山（根本氏同伴、岩戸迄出迎ふ）。（小宮鉦山手帳）
- 9月20日 社長、根本、日野も役場へ行く。部落有志（十市郎、藤太、和合会長）を合宿に招待す。（小宮鉦山手帳）
- 9月21日 岩戸祭り第1日目。午後社長退山帰郷。（小宮鉦山手帳）
- 11月10日 亜硫酸捲揚装置建設準備着手。（小宮鉦山手帳）

#### 1955（昭和30）年

- 3月1日 小宮新八氏に代わって根本亨氏が新所長に就任。
- 3月15日 焙焼炉完成。（小宮鉦山手帳）
- 3月23日 鉦石1トンを装入、焙焼を始める。（小宮鉦山手帳）
- 3月24日 三交代による本格的な作業開始
- 4月11日 十市郎と他1人、岩戸村助役を訪れ、焙焼炉50メートルで椎茸栽培試験をすることを申入れ。
- 7月5日 煙害焙焼積立金（5、6月分6万円）を日向興銀高千穂支店に預ける
- 7月23日 西斜坑掘り下がりより、不時の大湧水事件があったにもかかわらず着々機械化ととのい、生産量倍産（月精鉦800トン）の態勢となり、（根本亨「会社季刊誌の発刊を祝す」、中島鉦山季刊誌創立号より）
- 10月25日 本社幹部から土呂久鉦業所幹部宛て書簡。  
「地元並びに支庁の要請にも強いものがあるが、椎茸の栽培を至急始めてもらい度いと思います」（土呂久鉦業所業務書簡綴）
- 10月29日 土呂久鉦業所幹部から西臼杵支庁長へ。「砒素炉周辺の椎茸試験栽培につき技術指導願いの件」（土呂久鉦業所業務書簡綴）

#### 122-2 藤井仁蔵氏について

平川誠四郎さんの本人尋問（松尾訴訟第19回口頭弁論、1980年1月24日）より

弁護士 あなたが勤め始めた当時（昭和23年4月）精練夫は何人いましたか。

平川 藤井仁蔵という監督を含め8名でした。

#### 122-3 土呂久訴訟第2陣一審判決（第2分冊P6～7）が示した新焙焼炉の構造

第一節 鉦害の原因 第一鉦煙の排出

二 戦後における亜硫酸の製造

##### 1 製造設備等

土呂久鉦山の亜硫酸精練は、昭和17年以降中断されていたが、昭和30年になり、3

番坑の上方、4番坑の手前に、山の斜面を切り開いて新式の焙焼炉（以下「新亜砒焼窯」という。）が1基建設された。そして、大切坑と一番坑を中心に採掘した砒鉱をケーブルで運び上げ、粉碎した塊鉱と団鉱とを焙焼して亜砒酸の精錬を開始した。新亜砒焼窯は、外径約1.5メートル、内径約1メートル、高さ3メートルの、鉄製で内側に耐火レンガを張った円筒形の炉と、炉から煙道で結ばれた、高さ及び幅がいずれも約3メートル、奥行きが約14メートルの石積みの集砒室が4室と高さ約6メートルの煙突とからなっていた。炉は上部に漏斗状の鉱石投入口が、下部に残滓や灰を落とすためのロストルが、横に空気取入口兼覗き穴が設けられており、他方、集砒室は内部が4室に区切られて、それぞれに亜砒酸の取出口がつけられていた。

## 2 亜砒酸の製造方法

新亜砒焼窯の亜砒酸製造法も、原理的には旧窯と同様であったが、連続式の操業方法をとったところに特徴があった。すなわち、炉に砒鉱とコークスを投入し、点火後も、1時間に2、3回ずつ焙焼の終わった鉱石を炉の下方から取り出し、かつ、炉の上方から鉱石と燃料を投入し続け、1日3交代の作業で24時間途切れることなく焙焼を続けたのである。集砒室に沈降した亜砒酸のうち、3号室、4号室のものは、再度窯に投入されて精製された。

## 3 生産量

昭和30年から昭和37年にかけて土呂久鉱山で生産された亜砒酸は、少なくとも合計511.5トン記録し、これは年平均にすると63.9トンであった。

122-4 小宮新八氏について

\*114-3と重複

宮崎法務局延岡支局保存閉鎖登記簿謄本より

岩戸鉱山株式会社設立時（昭和11年12月23日）の「監査役」

土呂久鉱山労働者名簿より

小宮新八 明治30年4月18日生

入社昭和27年10月15日～退社昭和31年2月11日

墓碑（向土呂久の墓地に建っている）

（側面） 略歴 東京ニコライ露卒、昭和16年3月15日興亜学院採鉱科卒、中島商事社員、大分県木浦鉱業所長在勤2カ年、昭和27年10月1日土呂久鉱業所長勤務、昭和31年2月11日逝去、行年60歳。

（背面） 惟任日向高千穂の 名を言ふ三弥の土呂久山  
こがねしろがね地下資源 小豆八斗の蒔き高は  
犢（ことひ）の牛の角とやら 絶ゆることなき鉱脈に

捧げし命の尊とけれ	宝池山泉福寺非宝詠
群馬県邑楽郡小泉町 1422	小宮高樹之父
岩戸土呂久	小宮ミホ之夫

#### 佐藤ツルさんの話（2021年7月28日 電話で聴取）

昔、中島飛行機におらして、戦後になって土呂久に行けち言われて、群馬に親せきがあるのに、こっちに来らしたらしいですがね。心臓の病気で鉾山の所長をやめるごとになって、下に降りて死んだってす。向土呂久のいちょうの木の下に骨を埋めてくれということだったんで、そこに墓を建てて、群馬にある墓から分骨したってすがね。ミホさんの墓は、岩戸の泉福寺が納骨堂を建てたとき、そこに預けました。2人の娘が日之影の八戸におって、お参りに来るので、私もお参りするってすよ。

#### 小宮新八のメモより

入社	昭和 25 年 10 月 1 日
土呂久在勤辞令	昭和 27 年 10 月 1 日
同着任	昭和 27 年 10 月 15 日
社員辞職辞令	昭和 29 年 6 月 30 日
嘱託辞令	昭和 29 年 7 月 1 日
社員時代の給料	14,000
嘱託給料	33,000 (諸手当なし)

\*所長は昭和 30 年 2 月末まで続けたと思われるが、所長時代に定年、其の後は嘱託になったのではなかろうか。(川原)

#### 小宮高樹さんの話（1977年8月15日聴取）

入社したのは昭和 25 年 10 月。4 年半のブランクがあった。土呂久に行ったとき、中島鉾山はヤマの施設を切り売りしていた、との話がある。昭和 30 年 2 月末で休職になったとき、中島系列（直系）の人間は一人も居なくなった。この時期に、住友所有の 3 鉾区を中島に譲ったのは、実質的な住友支配ができあがったからだと思う。

#### 富高ツユ子さんの話（1979年4月20日聴取）

(小宮さんは) 鉾山追われて、首になって、半年以上この下（春目のツユ子さん宅下）におったろう。夫婦とも鉾山の社宅におられず、ここで死んだとよ。かわいそうに、なんでかしらん。「亜砒焼いて大丈夫か」と聞くと、小宮さん、いい人じゃったよ。「煙突を長くしたのがごまかしよ。ほんの嘘じゃが、ありや、ほんといかんとよ」「煙道を長くすれば臭いがなくなると、ごまかした」ち言いよった。胸部疾患に心臓など悪くなって、弱くなってから、首にされてしまった。「おいときやいいのに」。上でできた千保子をここに連れ

てきて育てた。

佐藤仲治さんの話（1980年7月27日聴取）

小宮所長は胸部疾患が悪かった。会社辞めて、春目にしばらくおって、ここで死なした。

122-5 向土呂久のイチョウの木

佐藤弘さんの話（1978年12月2日聴取）

（向土呂久の地蔵堂の前は、晩秋から初冬にかけて、黄葉したイチョウの葉が積んでいる）

地蔵さまは火の神様ということじゃが、和合会で土呂久に持ってきたげな。場所は和合会で買って。昔は、4メートル角の萱葺の社があったってすよ。終戦後の台風で大木が取れかかって家を倒した。それから社が小さくなった。うちの爺さんたちが若いころに来らしたんじゃろ。火伏せの神様の祭りは旧正月24日。その祭りの日を和合会の総会とした。今も、公民館の総会はこの日。ずっと前は、うちで総会と祭りをしよったってす。やめて10年くらいになるでしょうね。公民館でやるごつなって。イチョウの木はウメノばあさんが植えらして、70~80年になる。大分の小手川にウメノばあさんがおる。兄弟（ウメノと忠行）と一緒に2本植えた。地蔵さんが来らしてから、その社の前に。鉸山の時代は、あまり葉はつかんかったが、ついても青い葉のとき（夏）に落ちよった。実も何もならんかった。地蔵さんは、何年も何十年も、えらいな煙をかぶった。